ベトナム研修レポート

『ベトナムの小学校』

2008/12/24
国際学部 3 年
20627207
森栄真愛

1. はじめに

今回ベトナム研修によってハノイ・ダナン・ホーチミンの 3 都市を滞在した。ベトナムには日系企業が数多く進出しておりは想像していた以上に発展していたのに驚いた。けれども、都市と農村地域との格差があることも知った。Junko 小学校やダナン高等学校へと見学を行く機会がありベトナムの教育について見ることができました.

Junko 小学校はダナン市近隣クァンナム省ディエンフォック村にあり、私たちが研修中に訪れた中では都市ではなかったので、学校は貧しい家庭の子供たちにも学校がサポートしているという話を聞いて市場経済によってできた格差と教育は関係しているのかと思い小学校教育問題を調べて実際に Junko 小学校訪れたてみてきたことまとめたいと思います。

2 ベトナムとは

ベトナムの正式名称であるトナム社会主義共和国はインドシナ半島の東に位置し北は中国、西はラオスとカンボジアの接しており面積は約 32 万 9.241 平方キロメートルで細長い国である。気候は北部では亜熱帯気候性四季があるが南部では熱帯モンスーン気候で雨季と乾季など各地で気候が異なる。人口は約 8.520 万人(2007 年)、国民は約 86%がキン族と 53 の少数民族で成り立っている[1]。

千年以上中国に支配されたのちベトナム王朝が存在したが、フランス、日本と植民地にされる。1945 年日本撤退後ホー・チ・ミンは北にベトナム民主共和国の独立宣言。南のフランスと第一次インドシナ戦争、アメリカと親米政権相手にベトナム戦争が勃発した。1975 年サイゴン陥落によってベトナム戦争が終結。翌年、ベトナム社会主義共和国が成立した。

1986 年のドイモイ(刷新)によって今までの社会主義路線に資本経済と対外開放化を導入した。

3 ベトナムの教育制度

[1] 「外務省－ベトナム社会主義共和」
http://www.mofa.go.jp/Mofaj/area/vietnam/data.html

ベトナム育制度は小学校 5 年制（6 歳～）、中学校 4 年制（12 歳～）高等学校 3 年制（16 歳～）大学は主に 4 年制であるが、工科学系は 5 年制、医学部は 6 年制である。義務教育制度は日本と同様小・中学校の 9 年間である。都市部を中心として高等学校を含んだ 12 年間が普通教育として一般的である。

11 月 20 日ベトナム教師の日があり学校教育だけでなく塾、家庭教師、習い事の先生の感謝を表す日が存在する。

別の日にダナン高等学校を訪れたが女子生徒の制服がキン族の民族服ある「アオザイ」であった。

(2)ベトナム小学校の問題点

ベトナムの小学校では二部授業として通常午前に 7 時～11 時、午後に 13 時～17 時の午前、午後とそれぞれ 4 時間 1 日に 2 回教室を使用しての授業方式がある。だが、農村地域や郊外などでは二部授業を行っている学校が多い。二部授業を取り入れていることによって多くの子どもたちが授業を受けられるが、授業時間が少ない。ベトナムの年間総授業日数は 165 日、年間総授業時間数は 660 時間であるが国際標準の年間総授業日数は 180 日以上、年間総授業時間数は 1015 時間である。この現状に中央政府が二部授業から全日制へとの移行を少しずつ推し進めており現在ハノイやホーチミンなどの都市では全日制を取り入れている学校が増えてきている。

（2）財源

ベトナムでは教員給料は国庫負担であるがそれ以外の維持費（校舎の建築費、維持費、修繕費、その他の経常経費）は父母負担・地域負担となっている。

そのため、地域の財政の豊かさによってパソコンの授業や英語教育を取り入れている学校もあれば、わらぶき屋根で電気も通っていない学校も存在する。また、教員給料は国庫負担となっているが経済事情によっては教員給料も完全に支払えるとは限らないため、そのため臨時教員を雇用するときも父母負担・地域負担となってしまう。

なぜ、そこまで父母・地域負担が高いのかというと、教育サービスを全額国が支出するだけの国家収入がないからである。ベトナムの地方行政体の財源は、すべての種類の国家収入（「国営企業からの収入」「対外貿易からの収入」「非国営企業からの収入」「合併企業からの収入」などに分けられている。）をいったん中央政府のところに集めてそして法に従ってそれぞれの省などの地方行政府へと配分されるのである。国家収入によって、教育が左右されるのである。

今までは、ベトナムの初等教育の問題点について潮木守一編『ベトナムにおける初等教育の普遍化政策』（明石書店,2008）を参考に調べました。

次からは実際にベトナム研修で訪れた Junko 小学校について報告します。

3　Junko 小学校

（1）Junko 小学校について

明治学院大学国際学部 3 年生だった高橋淳子さんが夏休みにベトナムへ行ったことをきっかけに「ベトナムの子どもたちのために」と志なかば、淳子さんが交通事故で他界。彼女の遺志がベトナムの地に残るようにと淳子さんの両親やゼミの仲間達がはじめた「JUNKO Association」が集めた大学内の募金により、1995 年 9 月にダナン市の近隣クァンナム省ディエンフォック村に Junko 小学校が誕生した[2]。現在でも明治学院大学の Junko Association メンバーによって交流や助成金計画も行われている。

（2）Junko 小学校を実際に訪れて

実際に校長先生のお話を伺った。現在 645 人の生徒、33 人教員、21 クラスそのうち 4 クラスは台風の影響で校舎が壊れたため別のキャンパスで授業をおこなっており、現在建設中である。授業時間数は午前 7 時～10 時 40 分午後は 13：30～17 時 1 コマ 40 分授業である。基本的に授業は午前中だけであり、午後は自由選択であるが、今のところ 4，5 年生は自由選択によって午後の時間英語の授業があるが、大半の生徒は自由選択の授業を受けている。近い将来、3 年生も英語の自由選択をしたいが、教室不足などによりまだできないでいる。

科目数は、1・2 年 6 教科、3 年が 7～8 科目、4・5 年が平均 9 科目 (自由選択のため)である。

この地域には Junko 小学校の少し離れたところにも車の中から小学校があるのを目撃した。もともとこの地域の小学校が不足していたので Junko 小学校が設立したが、それでも Junko 小学校では年々新入生が増加しており教室が不足しているのが現状である。

Junko 小学校では日本と同様筆記用具、教科書などの諸費用が負担とが貧しい家庭には教科書を貸したりするなどの学校側のサポートがある。学費は無料であるが英語は 1 年間に 5 万ドンでの学費がかかる。

私たちが Junko 小学校を訪れた時は生徒が校庭に集まって体操をしていた。太鼓の音がチャイムであり太鼓の音がするやいやな一斉に各自の教室に戻って授業を受けていた。

今回 5 年生の家庭科のボタン付けの授業に見学させてもらった。
5･6 グループに分かれて教科書を見ながら実際に布にボタン付けをし、終わったグループから順々に黒板に貼り付けて行く。すべてのグループが布を黒板に貼り付けたら一

[2] 『Junko Association』http://www.junko-association.org/report_V_2004.html 2008/12/24

番早かったグループが評価し上位 3 をきめその理由を発表、その後先生がすべてのグループの評価をしていた。中には早く終わったがうまく縫えていなかったグループもあったが、みんなグループに分かれて早く黒板にもっていこうと教科書とグループ内で相談しながらボタンつけをしているのが印象的であった。授業では私たちがいたので生徒たちは多少落着きがなかったように思えたが、先生の話を聞き先生の指示通りに動き授業に集中していた。

ボタン付け後、数十分の時間を頂いて私たちと生徒で折り紙をやった時に生徒たちが定規を使って折り紙の折り目をつけながら折っているのが印象的であった。

授業終了後は学校の門では親が迎えにきて人であふれていた。校長先生の話によると生徒たちは近隣から通っており、1・2 年生は親に送迎 3 年生からは自分で通っているという。

4、感想

Junko 小学校があるクァンナム省ディエンフォック村は今まで訪れたダナン、ホーチミンと違ってちょっと車で走ると農村の風景が見られた。私たちが小学校を訪れ休み時間中にカメラを向けると生徒たちは満面な笑顔を見せてくれた。授業時間数や英語の授業などが限られているが、生徒たちは活気があり、熱心に授業受けている姿が印象に残った。

中央政府でも教育にも力を入れているが、教育の財源は父母・地域負担が強い傾向にあり、地域によって教育間の格差がさらに進んでしまうのではないかと思う。

参考資料

『ベトナムの教育制度』http://cantho.cool.ne.jp/ctu/edu/edu.html 2008/12/24

『Junko Association』http://www.junko-association.org/report_V_2004.html 2008/12/24

『外務省－ベトナム社会主義共和』
http://www.mofa.go.jp/Mofaj/area/vietnam/data.html 2009/01/10

参考文献

潮木守一『ベトナムにおける初等教育の普遍化政策』（明石書店,2008）